

巻頭言

グローバル人材育成教育学会 会長 勝又美智雄

英語教師たちよ、「グローバル人材」を目指そう

この春、英語教師のための月刊誌『英語教育』（大修館）に頼まれて「グローバル人材の条件」をテーマに4月号から9月号まで6回、連載した。1ページのコラムで1回の分量は約1550字と短い。そこでテーマを以下のように絞った。

- ① 「グローバル人材」と英語
- ② 「グローバル人材」の必要十分条件とは
- ③ 「英語ができる」日本人たちの問題点
- ④ 英語教師はグローバル人材教育に不向き！？
- ⑤ 英語力を高めるには日本語力も
- ⑥ 英語教師こそ「グローバル人材」を目指そう

読者である英語教師たちを強く意識して、全体を通したアクセントは「英語教師よ、がんばれ」だった。

担当の編集者はとても優秀で、丁寧に読んでくれていることはよくわかったが、ほぼ毎回のように「英語教師を批判するような表現は避けていただきたい」という注文が来た。新聞記者、大学教授として、これまで40年以上、いろんな雑誌に寄稿してきたが、文章表現について細かな書き直しを求められたのは事実上、初めてだと思う。

なぜ編集部がこんなに気を遣うのか、と最初は驚いた。そして英語教師はとてもプライドが高く、その分、自分を批判するような声には耳を貸したくない、という拒否反応が特に強いのではないかと気づいた。

これまでたくさんの英語教師と接してきたし、この学会の会員の8割近くは英語教師か英語教育の専門家だろう。その人たちは概して小中学校時代から成績優秀で、親にも先生にも褒められる模範生で、好きな英語を猛勉強して教職を選んだ、という人が大多数ではないか、と思われる。

そういう「エリート優等生」に共通するのは、教師や上司の言うことを素直に受け止めて、期待通りにうまく成し遂げる、という受信力・受容力と技術的な処理能力の高いことだ。その反面、自分を評価してくれない否定的な意見を素直に受け止めず、反発しがちなのではないだろうか。『英語教育』編集部もそれをよく承知しているからこそ、耳障りな意見・表現はできるだけ和らげようと努力しているのだろう、と感じた。

そういう目でこの半年間の『英語教育』の他の記事をよく読んでみると、文科省の教育政策を批判する論説などは、ほとんどない。原稿の大半は文科省の学習指導要領の改訂に合わせて、こういう対策をすべきだ、小学校英語はこう教えると効果的だ、中学・高校ではこう、と文部行政に即応して、いかにうまくやるか、という技術論と、英語の語彙・文法などの表現方法の指導や、英語専門家のマニアックな記事が中心になっている。そこでは全体を通して、批判精神はいらない、適応力こそが大事、という基本姿勢が透けて見えている。

だが、本来「グローバル人材」に最も重要な資質は、異論・批判を自分の考えを練り直す貴重な提言として歓迎し、お互いに合意できる地点がどこかを探り合う共同作業ができることだ。それこそが「異文化理解」の基本となる「異文化対立（衝突）」というべきもので、その衝突・対立に耐えられる力を鍛え、蓄えることこそが、今、最も求められる資質だと私は考えている。

それは排他的・独善的な一国至上主義を唱える大統領と、それを熱烈に支持する”White supremacists”がはびこる英語国の実態を見て、自分は何のために英語を教え、生徒・学生たちに英語を通して何を指導すべきかという自らの使命感を再認識することでもあるだろうと私は思っている。 (国際教養大学 名誉教授)